

# なは地域貢献便り 5月

「なは地域貢献便り」は、那覇市内の社会福祉法人等施設が、地域の応援団として取り組む情報誌です。

## 那覇市社会福祉法人等施設の皆様へ フードドライブ(食料提供)運動のご案内

新型コロナウイルス感染症に伴う失業、休業が広がる中で、毎日の食事にも困窮されている家庭が増えています。小規模法人ネットワーク化事業(ちゅいしいじい事業)では、新型コロナウイルス感染対策助け合いとしてフードドライブ(食料提供)運動を始めています。那覇市内社会福祉法人等施設協働で「今を支援できる地域貢献活動」に、皆様のご理解とご協力をお願いします。

**募集期間** 令和3年(2021年)3月1日(月)～6月30日(水)

**募集内容** □米(2019年度、2020年度、2021年度米)  
□缶詰 □レトルト食品 □カップ麺 □防災品 □お菓子  
※全て未開封、賞味期限3か月以上あるもの ※特にお米の支援ニーズが多くなっています

**受渡場所** 那覇市社会福祉協議会(那覇市総合福祉センター)  
住所/那覇市金城3-5-4 tel.098-857-7766 担当:山城章

事前に下記の内容でメールまたはFAXをお願いします

那覇市社会福祉協議会へ ○月○日 時間帯(午前・午後)頃に届けます。

**fax 098-857-6052 mail 1101tyui@nahasyakyo.org**

届け先/那覇市社会福祉協議会(那覇市総合福祉センター) 住所/那覇市金城3-5-4

目標  
食料品  
5千点

## 食糧支援の流れ (個々の相談を受けて、食糧支援と併せて関係機関と連携し適切な対応を行います)

受付場所・那覇市社会福祉協議会  
食糧支援等緊急プロジェクトチーム

制度の狭間で支援が必要な人(生活に困っている方)

社会福祉施設

寄付・食糧支援

- ・ゆうなの会 ・石嶺児童園
- ・若杉福祉会 ・そてつの会
- ・葦の会 ・うるま福祉会
- ・城南会 ・おきなわ共生会
- ・正清会 ・雅福祉会
- ・彩風の杜 ・日本赤十字社沖縄県支部
- ・乙羽会 ・一般社団法人ハーネス

事務局/那覇市社会福祉協議会  
(ちゅいネットなは事務局)

支援

- ・失業して食べるものもない。
- ・貯金がなく、頼る人もいない。
- ・離婚し子どもが小さくて働けない
- ・少ない年金で食が不十分
- ・公共料金などを滞納し、日常生活が維持できない
- ・単身高齢で要支援の孤食で見守りが必要
- ・買い物困難、通院をあきらめている
- ・就労に不安を感じている。

1. 生活困窮者世帯への支援
2. 支援団体の活動支援(子ども食堂等)
3. 関係機関と連携した緊急対応支援

## 那覇市内の社会福祉法人等施設から多くの寄贈を頂きました

那覇市内の社会福祉法人等施設から多くの寄贈を頂きました。ありがとうございます。早速、関係機関を通して生活困窮世帯や、子ども食堂等へ直接届けられます。引き続きご支援をお願い致します。(4月5日現在) 合計 271 点

- 1 就労支援サービス株式会社 代表 大畑昭康
- 2 小規模多機能ホーム安岡 代表 長堂和夫
- 3 就労支援センターふくぎ 代表 国吉正人
- 4 アルプスセンター 代表 岡田拓也
- 5 那覇市身体障害者福祉協会 代表 高嶺豊
- 6 沖縄中央福祉会 代表 安里富士子



## 那覇市第1層協議体実施報告

那覇市社会福祉協議会では、平成28年度より那覇市福祉部チャージンじゅう課から委託を受け、那覇市内の高齢者に関する課題解決の仕組みづくりを協議する場として第1層協議体を3月23日(火)開催しました。

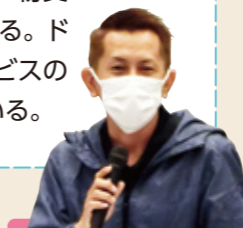
令和2年度は、特に移動手段に困難を抱える高齢者の課題解決に取り組むべく、社会福祉法人等の「地域における公益的な取組み」と連携して進めてまいりました。第1層協議体の構成員として、ちゅいしいじい事業(小規模法人ネットワーク化事業)から「社会福祉法人沖縄中央福祉会 彩風の杜なは」國吉俊佑氏、「社

会福祉法人ニライカナイ』豊村英氏、「社会福祉法人乙羽会 グリーンハウス国場」玉城正史氏、「一般社団法人ハーネス」嘉手川重一氏に参加いただいています。

当日は、構成員の皆様より移動支援に関する活発な意見を頂戴しました。



自治会活動への協力として共同売店を運営し、アルミ缶回収なども行っている。また、地域の方々の要望に応じた商品を取り扱ったり、事業所の方が買い物支援を実施している。ドア to ドアのサービスの必要性を感じている。



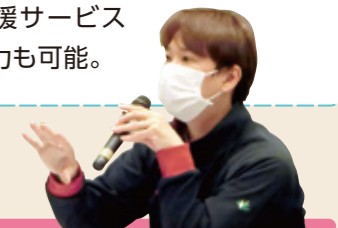
一般社団法人 ハーネス 嘉手川重一氏

南城市、小禄地区で就労支援事業や放課後デイ等を運営している。小禄地区のまち協へも参加しており、社会貢献事業として移動支援サービスについても検討したい。



社会福祉法人 ニライカナイ 豊村英氏

北中城村の施設で送迎サービスを1月から開始した。5件の依頼があるも稼働は0件。利用者からの急な変更への対応が難しいことや、時間設定や車輛が少人数対応であることが課題である。那覇市内での移動支援サービスへの協力も可能。



社会福祉法人 沖縄中央福祉会彩風の杜なは 國吉俊佑氏



## 第1層協議体



全国移動サービスネットワーク 那覇市社会福祉協議会 河崎民子氏 高野大秋

その他の構成員からも、企業や協働大使との連携、買い物に限らず通院や趣味活動への活用等、移動支援サービスに関する様々なご意見・提案が挙がりました。今後も、移動支援に関するニーズ調査を並行して行いながら、地域で必要とされる移動支援サービスを具体的な形にしていけるよう協議を進めていきたいと思っております。今後ともご協力の程宜しくお願い致します。



# 石嶺小学校区まちづくり協議会福祉部会とオリブ山病院の地域貢献



社会医療法人葦の会 法人連携統括室長 名嘉真朝春 氏

## はじめに

2011年3月11日の東日本大震災からこの3月で10年が過ぎた。3,11のあの日、大地震と津波の災害のニュース映像が放映され、日本だけでなく世界中が驚き、日本各地及び海外からも医療支援や、がれきの撤去、人命救助、ボランティア等のグループや個人が東日本に向かった。日本中いや世界中が大きな輪となり、震災後しばらくこの日本には強いつながりができて大きな痛みをみんなで背負い、みんなで協力しようとし国民全員で寄り添う機運を高めていった。あれから10年経ち、この国の今はどう変わったのでしょうか。

## 石嶺まち協の誕生

そのような大震災の、4か月後の2011年7月に「まちづくり協議会発足」の総会、その数日後、看板設置のセレモニーに当時の市長も出席、石嶺中学校の吹奏楽部の演奏と町内の関係者が集まり「石嶺小学校区まちづくり協議会」が正式にスタートしました。

那覇市首里石嶺町には公立や民間の児童施設、障がい者施設、高齢者施設のほか沖縄県総合福祉センターなどの施設が集まっていて、毎年8月には、各施設や地域の団体等が合同で「石嶺地域福祉祭り」を実施する等協力体制ができて「福祉村」と呼ばれてきた。



福祉部会

石嶺中学校区まちづくり協議会福祉部

## 福祉部の活動

まちづくり協議会には、広報部、環境部、子ども育成部、福祉部会の4部会ができた。その後商工会が加わりました。その福祉部会は、民生委員、社協、福祉関係者で構成されて、毎月の部会を開催してきた。その中から、要望があり石嶺中学校を訪問し、車いす体験、アイマスク体験等を毎年行い、さらに技術を高めるため、秋に2日間の福祉体験（職場体験）を30以上の事業所の受入れ協力により実施しています。また昨年は、オリブ山病院の精神科医3人

がクラスごとに「認知症サポーター養成講座」を行い、全員に那覇市からのオレンジリングが贈呈されました。寿命が伸び社会全体の高齢化が進む中、身近で健康相談ができるように、石嶺町内の琉銀、沖銀、JAの各銀行に場所を依頼し、年金支給日に午前9時頃から2時間、健康相談コーナーを開いて、担当（看護師等）を配置、血圧測定、血流測定・骨密度測定等を行い、年々相談者は増えています。



石嶺中学校福祉体験



健康相談コーナー



石嶺中学校 認知症サポーター養成講座

## オリブ山病院の地域貢献

医療・介護・福祉の関係者が関わるまちづくりの基本は、生活の場に医療・介護・福祉をさりげなく混ぜ込むことです。予防・健診を行うには、住民が病院に行くことはハードルが高く、病院に来てもらうより、身近な暮らしの生活の場に予防医療をおくのが望ましい。人びとが病気になる場所は、病院ではなく、生活の場所にあります。医療者が「まちづくり」をするということは、「治してやりたい」からではなく、「自らの力で良くなっていく」その過程を医療者がそとと支えることであります。これから少子高齢化がさらに進むことも確実で、日本は制度・分野の枠を超え、支援者と非支援者のこれまでの関係を越え、人と人、社会がつながり、生きがいや役割をもち、協力しながら暮らす「地域共生社会」の実現を目標としています。今コロナウイルスの危機に遭遇し、東日本大震災直後のように国民全体で強いつながりをつくる機会があり、「ちゅいしいじい事業」が、新年度に「医療、介護、福祉、行政、社協、地域住民が協力する時代を創ることを大きく期待します。

# 久田病院の地域人材育成の実践活動を通して「沖縄を代表する精神科病院をつくる。」



医療法人 正清会 副理事長 久田譲雄 氏

## はじめに

私が7年前前に広報戦略委員会を立ち上げた時に掲げた目標です。今言うとなれば違和感を持たれないかもしれませんが、当時は「こいつ何言ってんだ?」「精神科病院でつぶれるとしたら久田病院か〇〇病院でしょ?」と陰に陽に言われていました。ただ、私は本気でできると信じていました。「理由は?」と問われたら一番は自分の感覚がそう感じているからだとなってしまいます。定性的にいうと他の精神科病院と自院のスタッフを比べた時に劣っていると感じたことがなかったからということになります。これだけのスタッフがいればこんな事言われるのは経営（マネジメント）に問題があるだけでスタッフの問題ではないと思っていました。中日の監督に落合氏が就任したときに「現有戦力の10%の底上げで優勝できる。」と仰っていましたが当時の私も同じ心境でした。

## 適材適所の人材配置

久田病院が明確に成長軌道に乗るきっかけとなったのは5年前に看護部の大城（当時病棟の主任）が看護部長に就任してからです。彼はそもそも私より先輩であり仕事でも人望もありました。だから部長になってもらったのですが、ここで言いたいことは、慣習などにとらわれず、適材適所に人材を配置し力を発揮してもらえば法人も劇的に成長できることを実感したことです。大城は当時の看護部でいうと10人抜きくらいで部長に就任しています。この5年間は「久田病院にはできないよ。」と言われたことを大城と共にやり、達成してきた5年間でした。



看護部長 大城盛博 氏

## 無料塾について

さて、地域人材育成の話ですが、当法人でその話となると今であれば看護学校進学を目指す方のための無料塾のことになると思います。無料塾はもともと昨年1月頃に大城に「一緒にやりませんか?」と声をかけ、了承をもらって諸々の準備をして6月頃にスタートしました。

## 無料塾を始めた理由

大きく分けると二点あります。まず第一に進学のために塾へ通うのはお金がかかり、そのために進学を諦めてしまうのが余りにも勿体ないと考えたからです。さらに昨年は新型コロナウイルスの感染拡大で世帯収入が減り、例年以上に進学

を諦める方が増える可能性があったからということもあります。自分ではどうにもできない要因のために夢を諦めてほしくなく、何かできることはないかと以前から考えていたので、完全無料という形となりました。第二に地域のためにできることをしたいと考えたからです。地域貢献に関しては、これまでも子供の居場所への寄付等を行ってききましたが、直接の貢献を行いたいとずっと考えていました。

初年度となる今回は、高校生を中心に一般の社会人の方や他の病院で働いている方にも受講いただきました。世代を超えた交流ができるのは大きな意義があると感じました。高校生にとってはすでに病院で働いている方と話し、共に学び、試験勉強だけでなく学びが多くあったようです。合格実績としては県内、県外合わせて7名の方に合格いただけました。常勤講師が私と大城しかいないため少人数しか受け入れできないのですが、そのため受講生同士の結びつきが強かったように思います。このまま塾を継続して塾出身者同士のネットワークができてくれたらと思いました。そうすれば各医療機関や福祉介護施設等に就職した後に信頼関係のあるネットワークが既にあるので、連携がとりやすくなるからです。地域連携の肝はどれだけIT化が進もうがアナログな人間関係にあると考えています。この事の実現のため出来る限り無料塾を継続したいと考えております。



無料塾の学習様子

## 今後の目標

また、私自身は数学科出身ですので、無料塾を看護、医療系への進学のみならず理系へ進学希望の方の数学指導まで広げられたらと考えています。グローバル化、IT化が進む中で理系人材の育成、理系人材のネットワーク作りが明らかに遅れているし急務だと考えているからです。そこまで到達することが地域人材育成での私の目標です。

新型コロナウイルスとの戦いは終わりが見えず閉塞感が漂ったりしていますが、明けぬ夜はないと信じ皆様と共に乗り越え、地域貢献を行っていきたくと考えております。



久田病院